

自己統制が逸脱行動実行意図に及ぼす効果 ：自己統制の特性的側面と状況的側面

中川知宏¹⁾，林洋一郎²⁾

Effect of self-control on intent of deviant behavior ：Aspects of trait and state self-control of Applied Sociology

NAKAGAWA Tomohiro, HAYASHI Yoichiro

Previous studies have demonstrated that self-control has trait and state aspects. The former assumes that self-control is stable over time, whereas the latter is changeable with the given situation. As trait and state aspects are not mutually exclusive, we examined the interaction effect of trait and state self-control on deviant behavior using a scenario method. We provided 46 participants (20 men and 26 women) with six scenarios depicting a conflict situation and asked them whether or not they would commit deviant behavior. Then, participants described the cost and severity of committing deviant behavior (situational self-control), and rated their intent to commit deviant behavior. We also asked them to rate their perceived degree of trait self-control. We conducted a hierarchical multiple regression analysis on intent to commit deviant behavior. The results revealed that trait and situational self-control were related with intent to commit deviant behaviors but we did not find a significant interaction effect. Furthermore, we also found an interaction effect between a subcomponent of trait (anger) and situational self-control by conducting additional analysis. These results implied that our hypothesis was partially supported.

キーワード：① 特性的自己統制 ② 状況的自己統制 ③ 逸脱行動

問 題

特性としての自己統制

これまで多くの研究者が犯罪の原因を論じてきたが、Gottfredson & Hirschi (1990) は「犯罪の一般理論 (General Theory of Crime)」の中で、犯罪や逸脱行動を規定する最も有力な予測因は (低) 自己統制 (low self-control) であると主張した。しかしながら、彼らは自己統制を構成する要素に関しては議論しているものの、自己統制の定義に言及しておらず、

Akers (1991) はこの点を批判している。これを受けて Hirschi & Gottfredson (1994) は犯罪や逸脱行動が欲望 (例えば、金が欲しい) を即時的に充足させるという機能を備えていることに着目し、自己統制を一時的な利益以上に長期的なコストを被るような行為を避ける、傾向として定義した。逆に、低自己統制は長期的コストを考慮せず、一時的な利益を得ようとする傾向と定義される。また、低自己統制は幼少期の家庭環境によって形成された後、比較的安定した傾向を示すとされている (Gottfredson

1) 近畿大学総合社会学部 心理系専攻・講師 (犯罪心理学)
2) 慶応義塾大学大学院経営管理研究科・准教授 (社会心理学)

& Hirschi, 1990)。つまり、彼らは自己統制を後天的に形成された特性的なものとしてみなしていると解釈することができる（特性的自己統制：trait self-control, TSC）。

その後、Gottfredson & Hirschi (1990) の理論的仮定に基づき、Grasmick, Tittle, Bursik, & Arneklev (1993) は、短気 (temper)、衝動性 (impulsivity)、身体的活動性 (physical activity)、単純課題志向 (simple task)、自己中心性 (self-centered)、リスクシーキング (risk-seeking) の6下位尺度を含む低自己統制尺度を作成し、犯罪機会が与えられた時に低自己統制は犯罪行為をより良く予測することを示した。Grasmick *et al.* (1993) が作成した低自己統制尺度は様々な研究者によって使用され、Vazsonyi たちは文化的基盤に依存することなく低自己統制が次元性を確保していること、低自己統制が犯罪や逸脱行動を予測することを示した (Vazsonyi, Pickering, Junger, & Hessing, 2001; Vazsonyi, Wittekind, Belliston, & Van Loh, 2004)。低自己統制尺度は欧米のみならず日本でも使用され、河野・岡本 (2001) は成人受刑者 190 名を対象として低自己統制が犯罪進度に及ぼす影響を検討した。分析の結果、実親の受刑歴や欠如、または家庭が経済的に困窮しているような家庭環境で育った者は低自己統制傾向が強くなり、これが受刑者の犯罪進度を深めていた。また、中川・大淵 (2007) は専門学校生を対象に高校時代のことを回顧させ、集団レベルと個人レベルの低自己統制がそれぞれ集団的不良行為に及ぼす影響を検討した。その結果、少年自身の低自己統制傾向がそれほど強くなくとも、衝動性やリスクシーキング傾向が強い仲間が多い集団に所属していると集団的不良行為に関与することが多いことを示している。これらの結果は自己統制の低さが犯罪や逸脱行動に結びつくことを示している。

しかしながら、Gottfredson & Hirschi (1990) が提唱した特性としての自己統制は数多くの議論と批判を呼んだ。批判の一つは、TSC が犯

罪や逸脱行動を予測するというのは同義語反復的というものである (Akers, 1991)。その他に、TSC の犯罪に対する予測力がそれほど高くないことや (Pratt & Cullen, 2000)、企業犯罪のような現象を TSC の観点から適切に説明できないことが挙げられる。それは、企業に所属する社員の多くが高校卒業以上の学歴を有しており、それを修める過程において自分自身を律することが求められることを考慮すると、一定の TSC を備えていると推測できるためである。

状況的概念としての自己統制 (SSC) とその測定

このような潮流の中、Tittle, Ward, & Grasmick (2004) は自己統制の特性的側面だけでなく、状況的側面を重視することが重要であると考えた。つまり、自己統制が「できる」ことと自己統制を「行使しよう」とすること³⁾は概念的に弁別する必要がある、両側面は犯罪や非行に対して交互作用的効果を生み出すとした。また、Tittle *et al.* (2004) と時を同じくして、Hirschi (2004) は自己統制が単なる特性ではなく、認知的評価を伴う概念であると主張し、これを「特定の行為に伴うあらゆる潜在的コストを考慮する傾向」と再定義した。この定義は従来の自己統制とは異なり、特定の状況下における逸脱行動がどのようなネガティブな帰結をもたらすかということを考慮するという点において状況的な概念と言えるだろう (状況的自己統制：situational self-control, SSC)。さらに、Wikström & Treiber (2007) は Hirschi (2004) の自己統制の定義には触れていないものの、同じように自己統制を状況的概念として扱うことが望ましいと述べている。Wikström (2006) によると、自己統制が行動に対して重要な役割を果たす状況は (1) 個人が複数の行動選択肢 (i.e. 違法行為に関与するか、それとも、関与しないか) を考慮し、(2) 実行する行動が個人の道徳観との間に葛藤が生じる場合のみであるとしている。これらの議論は、自己統制とは特性として備えているもので

3) Tittle *et al.* (2004) は、これを desire to exercise self-control と表現している。

はなく、特定の状況下でこれを行おうとするか否かという個人の意思（選択過程）であるという点において共通している。

状況的概念として自己統制が議論される過程において、これに関する測定方法も思案された。上述の Tittle *et al.* (2004) は自己統制の状況的側面 (SSC) に関する尺度を自己統制理論と一定の共通要素を持つ社会的統制理論や社会的学習理論などで用いられる項目 (e.g. あなたがスポーツイベントなどで違法な賭けごとをしなければ、あなたが大事に思っているほとんどの人たちはあなたのことを褒めるだろう) をもとに作成している。彼らは TSC と SSC が犯罪行為に及ぼす交互作用効果を検討するため、第 16 回オクラホマ市年次調査から 350 名の成人データを集めた。分析の結果、各主効果が有意であったことに加え、自己統制の 2 側面の交互作用が有意であり、自己統制の行使意欲と犯罪行為は負の関連を示したが、この関係は特性的自己統制が低い群においてより強く見られた。この結果は彼らの考えを支持するものであり、TSC と SSC の両側面が犯罪行為を説明する上で重要であることを示している。同様に、Hirschi (2004) も 9 項目からなる尺度 (e.g. 教師があなたのことをどのように思っているか気になりますか) を考案しており、この尺度は対象者にとって重要である人物 (両親や教師など) を項目内容に含んでいる。こうした人物からの評価懸念や関係性の破綻を思い浮かべることが犯罪や非行を抑制する要因となるという点において SSC を測定していると考えられることができる。この前提に基づき、Hirschi は各項目を抑制因として仮定し、それらに対する肯定反応が多いほど、非行への関与が抑制されるだろうと仮説を立てた。この仮説を検討するにあたり、1965 年に実施したリッチモンド青少年プロジェクト (Richmond Youth Project) から中学生および高校生 3,339 名のデータを収集し、再分析を行った。分析の結果、抑制因の

数を多く報告した少年ほど非行に関与する割合が低かったが、あくまで間接的な指標と言えるだろう。Hirschi (2004) が主張する操作的定義に則ると、SSC を測定する上で重要なことは個人が持っている抑制因 (潜在的コストに相当する) の数 (number) とその深刻さを示す顕現性 (salience) を考慮することである。しかしながら、上記のように調査参加者に項目を提示し、それらに対する反応を計算する方法では、その個人がどの程度の抑制因を持っているのか判断することができないことに加え、それらに対する顕現性を検討することができないという限界がある。

そこで、Piquero & Bouffard (2007) は Hirschi (2004) の操作的定義をより直接的に反映した方法で SSC を測定しようと試みた。具体的には、逸脱行動誘発状況⁴⁾をシナリオとして提示し、その状況下で逸脱行動に関与した場合、どのような良くないこと (cost) が自分の身に起こるかということについて自由記述 (最大 7 件までの記述欄がある) を求めた。その後、記述した内容が自分の身に起こった場合、それらは自分にとってどれくらい深刻なもの (salience) であるかということの評定させ、それらの評定平均値を算出した。抑制因をどれくらい持っているか (コスト) ということに加えて、それらに対する重要さの認識 (顕現性) が重要であるという観点から、彼らは SSC 得点をコスト数×顕現性の平均値で算出した。こうして算出された SSC と TSC の側面を測定した低自己統制尺度 (Grasmick *et al.*, 1993) を用いて、シナリオ上で調査参加者が評定した逸脱行動意図に及ぼす効果を分析した結果、SSCの方が逸脱行動意図をより良く予測することが示された。

本研究の仮説

しかしながら、Piquero & Bouffard (2007) の研究は TSC と SSC を個別に扱っており、こ

4) 彼らは二つのシナリオを提示しているが、ひとつは飲酒運転 (Drunk-Driving Scenario)、もう一つは性的侵害 (Sexual-Aggression Scenario) に関する逸脱行動誘発状況である。両シナリオはともに飲酒運転や相手の意思を無視した性的行為を行うかどうかという葛藤状況が描かれている。

これらの交互作用効果は検討していない。また、Tittle *et al.* (2004) は TSC と SSC の交互作用効果を検討しているものの、上述したように SSC の測定は間接的なものであった。そこで、本研究では Piquero & Bouffard (2007) が提案した SSC の測定法を採用し、TSC と SSC が逸脱行動に及ぼす交互作用効果を検討する。SSC は特定の状況下で行使するものであるが、これを行使するか否かは所与の状況下において逸脱行動に関与することがその個人の道徳的価値観と相反するかどうかに依存するとされている。自己統制ができない (TSC が低い) 者は逸脱行動に関与することによる道徳的価値観の葛藤が生じにくく、即座に逸脱行動に関与すると考えられるので、SSC の行使⁵⁾と逸脱行動実行意図は関連が見られないだろう。しかしながら、自己統制ができる (TSC が高い) 者は逸脱行動に関与することと道徳的価値観の間に葛藤が生じやすいため、SSC を行使するほど逸脱行動意図が抑制されるだろう。

方法

調査参加者

大学の講義を通じて私立大学生 46 名 (男性 20 名、女性 26 名) にシナリオ調査を実施した。平均年齢は 19.2 歳 ($SD = 1.07$) であった。

手続き

シナリオを用いた状況的自己統制 (SSC) の測定

本研究では、SSC を測定するために、Piquero & Bouffard (2007) のシナリオ法に基づき、逸脱行動誘発状況に関する 6 つのシナリオを作成した。シナリオの作成にあたっては、大学生が日常的に経験すると予想される場面を考慮し、サークルの飲み会や定期試験のような大学関連の逸脱行動誘発状況に加えて、アルバイトや日常生活における逸脱行動誘発状況を用いた。

各シナリオ (Appendix 参照) は逸脱行動を

選択するか否かという葛藤状況が描かれている。そうした葛藤状況下で、逸脱行動を取った場合に予想されるコスト (自分の身に起きる良くないこと) を自由に記述するよう求めた (1 シナリオにつき最大 10 個まで記述可能)。この自由記述課題はシナリオごとに 3 分間の制時間限を設け、全ての参加者が同時に始めて同時に終わるように第一著者が時間を計測した。なお、順序効果による回答の歪みを避けるため、シナリオはランダムに提示した。

自由記述課題終了後、参加者が記述した各コスト (コスト数) が自分にとってどの程度深刻なもの (顕現性) であるかを評定した。深刻さに関する評定は「先ほど、あなたが書いた《良くないこと》があなたの身に起こったとすると、それはあなたにとってどの程度深刻な問題ですか。各内容について 1 点～6 点で評価してください」とたずね、「1. まったく深刻な問題ではない」から「6. とても深刻な問題である」で回答を求めた。

各シナリオで記述したコスト数とそれらの深刻さに関する評定平均値を求め、これらを乗算した値を SSC 得点として算出した。

特性的自己統制 (TSC) 尺度

特性としての自己統制を測定するために Grasmick *et al.* (1993) が作成した低自己統制尺度 24 項目の邦訳版を用いた。邦訳にあたっては、はじめに第一著者が各項目を翻訳し、その後、それらをネイティブスピーカーが校閲した。この尺度は衝動性、単純課題志向、身体活動性、自己中心性、リスクシーキング、短気の 6 下位尺度 (各下位尺度は 4 項目) から構成され、各項目は「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」までの 5 点尺度で評定を求めた。

逸脱行動実行意図

上述のシナリオを読んだ後、「実際に、あなたが先ほどのシナリオのような状況にあったと

5) シナリオ上でコストを思い浮かべた数と、それらの深刻さ評定の平均値を乗算した値が SSC 得点であり、この数値が高いほど SSC が行使されていることを意味する。

Table 1 各シナリオにおけるコスト数の記述量

	飲酒運転	雨傘窃盗	カンニング	自転車盗	横領	twitter	total
<i>M</i>	3.39	3.30	3.20	2.80	3.26	3.02	3.16
<i>SD</i>	1.11	1.33	1.28	1.09	0.98	1.20	0.82

Table 2 各シナリオにおける深刻さの評定

	飲酒運転	雨傘窃盗	カンニング	自転車盗	横領	twitter	total
<i>M</i>	4.74	4.63	4.82	4.41	4.91	5.09	4.76
<i>SD</i>	0.74	0.71	0.71	0.89	0.65	1.00	0.47

Table 3 各シナリオにおける逸脱行動実行意図の評定

	飲酒運転	雨傘窃盗	カンニング	自転車盗	横領	twitter	total
<i>M</i>	1.59	2.76	3.72	2.13	2.37	1.67	2.37
<i>SD</i>	0.91	1.25	1.67	1.41	1.25	1.03	0.83

したら、どの程度、〇〇という行為をする可能性があると思いますか」とたずね、これを「1.絶対にしない」から「6.絶対にする」までの6点尺度で評定を求めた。

結果

記述統計量と信頼性

各シナリオは逸脱行動誘発状況が描かれており、調査参加者にそれぞれのシナリオ状況で、逸脱行動に関与した際のコストとその深刻さ、そして実行意図を評定するよう求めた。ここでは、評定を求めた3つの変数について各シナリオとシナリオ全体で平均値と標準偏差を算出した。逸脱行動に関与した場合のコスト数はシナリオであまりばらつきは見られないが、全シナリオの平均コスト数は3.16であった (Table1)。同様に、深刻さの評定においてもシナリオ間であまり評定差は見られず、全シナリオの深刻さに関する評定平均値は4.76であった (Table2)。これらのことから、コスト数の想起に関しては決して多いとは言えないものの、それらに対する深刻さ評定は中点 (3.50) よりも高く、逸脱行動に関与した際に生じる可能性があるネガティブな状況が現実となった場合、深刻であると調査参加者は判断していたと考えられるだろう。逸脱行動については、各シナリオで評定値にばらつきが見られ、カンニングシナリオの平均値が3.72と最も高

く、中点 (3.50) を超えていたが、飲酒運転シナリオの平均値は1.59と中点 (3.50) を下回っていた。全シナリオの逸脱行動実行意図に関する評定平均値は2.37であり、中点 (3.50) を下回っており、シナリオのような状況下であっても、逸脱行動を実行する意図は弱いと言えるだろう (Table3)。

次に、本研究で用いる理論変数の平均値と標準偏差、相関係数を算出した (Table4)。低自己統制尺度 (TSC) の平均値は2.81であり、中点 (3.00) よりも低く、調査参加者の特性的自己統制が比較的高いことを示している。なお、低自己統制尺度の信頼性を求めるため、Cronbachの α 係数を算出したところ.812であり、満足すべき水準を示していた。最後に、逸脱行動実行意図の平均値は2.37であり、中点 (3.50) を下回っており、シナリオのような状況下であっても、逸脱行動を実行する意図は弱いと言えるだろう。なお、各変数の相関係数については、TSCとSSCはともに逸脱行動実行意図と有意 (または、有意傾向) な関連を示したが、TSCとSSCは非有意であった。

Table 4 各理論変数の記述統計量と相関係数

	1	2	<i>M</i> (<i>SD</i>)
1.TSC			12.81 (0.50)
2.SSC	-.047		15.10 (4.12)
3.逸脱行動実行意図	-.296*	-.287†	12.37 (0.83)

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 5 TSCとSSCが逸脱行動実行意図に及ぼす効果

	Model1	Model2
TSC	.283*	.313*
SSC	-.274 †	-.295*
TSC × SSC		.112*
R^2	.163*	.174*
ΔR^2		.011

Note. 表中の数値は標準化回帰係数
 † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

仮説の検討

TSCとSSCが逸脱行動実行意図に及ぼす効果を検討するため、階層的重回帰分析を以下の手順に従って行った。第1ステップでは、TSCとSSCを重回帰モデルに投入し、第2ステップではこれらに加え、TSCとSSCの交互作用項を投入した。分析の結果、 ΔR^2 が非有意であったため、Model 1の結果を採用した(Table 5)。Model 1では、TSC ($\beta = .28, t(44) = 2.20, p = .049$)とSSC ($\beta = -.27, t(44) = -1.96, p = .057$)は共に有意(傾向)であり、予測したように、低自己統制(TSC)傾向が強いほど逸脱行動意図が高まり、SSCを多く行使するほど逸脱行動意図が抑制された。しかし、我々が仮定したTSCとSSCの交互作用は有意ではなかったため、補足的に以下の分析を実施した。

特性的側面を測定した低自己統制尺度は6つの下位要素から構成されるので、各下位要素を用いて同様の分析を実施した。分析の結果、短気(TSC)とSSCを投入した重回帰モデルでは、モデル間における決定係数の増分が有意であったため($\Delta R^2 = .151, F(1, 42) = 8.36, p = .006$)、Model 2を採用した(Table 6)。

Table 6 TSC(短気)とSSCが逸脱行動実行意図に及ぼす効果

	Model1	Model2
TSC(短気)	.103*	.149**
SSC	-.285 †	-.378**
TSC(短気) × SSC		.402**
R^2	.093*	.244**
ΔR^2		.151**

Note. 表中の数値は標準化回帰係数
 † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

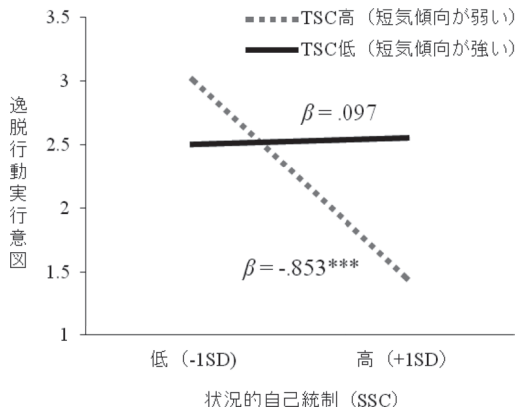


Figure 1 TSC(短気)とSSCの交互作用

Model 2では、SSCを多く行使するほど逸脱行動実行意図が抑制されたが($\beta = -.38, t(44) = -2.74, p = .009$)、TSCは逸脱行動実行意図を予測しなかった。さらに、交互作用項が有意($\beta = .40, t(44) = 2.89, p = .006$)であったため下位検定を実施したところ、Figure 1に示すように短気傾向が弱い者の場合(TSC高)、SSCを行使するほど逸脱行動実行意図が抑制されるが($\beta = -.85, t(44) = -3.59, p < .001$)、短気傾向が強い者の場合(TSC低)、SSCと逸脱行動実行意図の間には関連が見られなかった($\beta = .10, t(44) = 0.52, p = .608$)。

考察

本研究の目的は、Piquero & Bouffard (2007)が考案したSSC測定法を採用し、自己統制の特性的側面と状況的側面が逸脱行動実行意図に交互作用効果を及ぼすかどうかを検討することであった。

階層的重回帰分析の結果、6下位要素から成る低自己統制尺度(TSC)を一次元として分析に投入した場合、TSCとSSCはそれぞれ有意な関連を示していた。TSCは逸脱行動実行意図と正の関連を示しているが、これはGrasmick *et al.* (1993)が作成した尺度が低自己統制を測定しているためである。この尺度は得点が高いほど、自己統制が低いことを意味するため、TSCが低い者ほど逸脱行動への実行意図が高まることを示している。これはTittle

et al. (2004) をはじめとする多くの先行研究と一致する結果であり、TSC が低い者は逸脱行動に関与することによって得られる即時的利益に反応する傾向が強いと考えられる。それゆえ、そうした特徴を備える者は逸脱行動を誘発するような葛藤状況下において、逸脱行動を実行しようとするのだろう。また、Piquero & Bouffard (2007) の知見と一致して、SSC も逸脱行動に有意な負の関連を示していた。これは、所与の状況で逸脱行動に関与した際のコストを多く想起し、それらが当人にとって深刻な出来事であると知覚すれば、逸脱行動の実行意図が低減することを意味している。これらの結果は、自己統制の特性的側面と状況的側面が加算的に逸脱行動の実行意図を抑制することに寄与していることを示すものである。

しかしながら、TSC と SSC の交互作用は有意ではなかったことから、我々の仮説は支持されなかった。そこで、補足的に TSC を構成する 6 下位尺度ごとに、同様の分析を実施した結果、短気のみ SSC と有意な交互作用を示した。下位検定を実施したところ、些細な嫌悪刺激に対して怒り反応を示しやすい者は SSC の行使と逸脱行動の実行意図に関連は見られなかった。しかし、些細な嫌悪刺激をさほど気に留めない者は、SSC を行使するほど実行意図が低減していた。TSC と SSC の交互作用が示されたという点においては Tittle *et al.* (2004) と同様であるが、彼らは TSC が弱い者は SSC を行使するほど逸脱行動が低減することを示した。一方、TSC が高い者は SSC と逸脱行動の間に有意な関連は見られなかった。この点において、Tittle *et al.* (2004) の研究と本研究の結果は異なっているが、このような相違はなぜ生じたのだろうか。

Wikström & Treiber (2007) は自己統制を状況的概念として捉えており、これを行使するかどうかは特定の状況下で逸脱行動に関与することと個人が内在する道徳的価値観の間で葛藤が生じていることが前提であるとしている。葛藤が生じている場合、逸脱行動に関与するかどうかということ熟慮するが、そうでない場合

は習慣的に逸脱行動に関与するとされている。例えば、飲酒後に自転車を運転する際、飲酒運転をすることが当人の道徳的価値観と葛藤を起こしている状況において、SSC を行使するかが逸脱行動への関与を規定する。立ち戻って、Tittle *et al.* (2004) の研究と本研究の相違点について考えると、そのひとつは逸脱行動の悪質性といえるだろう。彼らが使用した逸脱行動の指標は賭けごとのように比較的軽微なものから他人に対する身体的暴力のような重大なものまで含まれているが、我々のシナリオは自転車の飲酒運転やオンライン上での悪口の書き込みなど比較的軽微な逸脱行動のみを扱っていた。このような悪質性の弱い逸脱行動誘発状況下では、低自己統制群 (TSC 低) は道徳的価値観との葛藤が起こらないため、深慮することなく、習慣的に逸脱行動に関与するだろうと判断した可能性が考えられる。しかし、自己統制群 (TSC 高) は軽微な逸脱行動であっても内在する道徳的価値観との間に葛藤が生じるため、提示されたシナリオ状況において SSC を行使した者ほど逸脱行動への関与を控えようという反応を示したものと考えられる。一方、Tittle *et al.* (2004) の逸脱行動指標は我々が仮定した逸脱行動とは異なり、悪質性が強い行為を含むものであった。逸脱行動の悪質性が強い場合、低自己統制群 (TSC 低) であっても、それに関与することと道徳的価値観との間に葛藤が生じるため、SSC を行使するほど逸脱行動が抑制されたと考えられる。しかし、自己統制群 (TSC 高) は逸脱行動の悪質性が強い場合、即時的利益よりも長期的利益を考慮し、それらを損なう可能性に強く注意が向くと考えられる。それゆえ、SSC を行使するかどうかということに関係なく、習慣的に逸脱行動への関与を控えたのではないかと推察することができる。こうした点を考慮すると、自己統制群において SSC が逸脱行動を抑制するのか、それとも、低自己統制群において SSC が逸脱行動を抑制するのかは、逸脱行動の悪質性に加えて、道徳的価値観との葛藤が生じるかどうかということに依存していると考えられる。

代替的説明の可能性と逸脱行動の抑止策

本研究は TSC と SSC が逸脱行動実行意図に及ぼす交互作用効果を検討したが、代替的説明として、これらを媒介モデルの観点から議論することも可能である。つまり、TSC が高い者ほど SSC を行使するため逸脱行動を抑制するというモデルである。Table4 をみると、TSC と SSC の相関係数は $-.04$ という極めて小さな値であり、SSC は TSC に依存していないと考えることができる。さらに、ブートストラップ法 (bias-corrected 法) を用いて代替モデルの媒介分析を実施したところ、間接効果は非有意であり (point estimate = $.013$, 95% CIs [$-.0346$, $.1138$])、少なくとも統計的観点からは媒介モデルによる代替的説明が妥当でないことを示すものである。

一方、本結果は従来から主張されてきた TSC だけではなく、SSC が加算的に逸脱行動に影響していることを示している。特に、所与の状況における SSC の行使が可変性に富むことを考慮すると、これを活性化するようなメッセージを提示することが逸脱行動の抑止につながると考えられる。これに関連して、環境犯罪学者の Clarke & Homel (1997) は状況的犯罪予防 (situational crime prevention) という概念を提案しており、これは物理的環境をコントロールすることで犯罪を未然に防ぐことを目的としている。彼らは状況的犯罪予防を 4 つのカテゴリーにまとめているが、その一つに「罪悪感や恥ずかしさ」を喚起させるというカテゴリーが存在する。この典型例は人の目を強調した防犯ポスターが挙げられるが、これは潜在的な犯意ある者に対して他人が見ているというメッセージを伝達することによって、逸脱行動に関与することのリスクを抑えるだけでなく、それに伴う罪悪感や人間関係の破綻を想起させる役割があるものと推察される。これらの潜在的コストが活性化されるのであれば、SSC の行使を促し、逸脱行動が抑制されるだろう。それゆえ、特定の場所にそうした潜在的コストを想起させるようなメッセージを掲示しておくことが、逸脱行動の防止に資するものと考えられる。

方法論的境界と今後の課題

本研究は Piquero & Bouffard (2007) が考案した測定法に則り、SSC を測定したが、この方法の問題点として SSC の記述内容の重複を指摘することができる。本研究では、SSC を測定する際、シナリオに描かれている逸脱行動に関与した場合、自分の身に起こる可能性がある良くないことを記述させたが、その中には実質的に同じ内容を記述しているものがあった。例えば、「友だちから軽蔑される」という記述の他に「友だちから嫌われる」というような記述をするケースがあるが、これは友人関係が破綻するという点において実質的に同じことを記述しているにすぎない。しかしながら、測定上は 2 つとしてカウントされるため、適切に測定できていない可能性がある。こうした問題に対処するためには、SSC の記述内容をカウントするための統一的基準を定めた上で、複数の研究者によって内容を精査するという方法を挙げることができる。その他には、予め SSC の内容 (e.g. 友人から白い目で見られる) を項目として提示した上で、その内容が生じる可能性を評定させるという方法が考えられる。

今後の課題として、いくつか挙げることができるが、ひとつはシナリオにおける逸脱行動の悪質性操作である。本研究では、シナリオ上で比較的軽微な逸脱行動を扱っていたが、先述したように、逸脱行動の悪質性によって TSC と SSC の交互作用効果に変化する可能性がある。それゆえ、今後の研究では、逸脱行動の悪質性を考慮したシナリオを用意する必要があるだろう。もうひとつは、本実験はシナリオを用いているため、あくまで架空状況であり、逸脱行動指標も実際の行為ではなく意図を測定したものであった。それゆえ、現実場面において逸脱行動に関与するかどうかは不明である。これを検討するにあたり、縦断的調査や実験室実験を実施することによって、生態学的妥当性を高めることができるだろう。

引用文献

- Akers, R. L. (1991). Self-control as a general theory of crime. *Journal of Quantitative Criminology*, *7*, 201–211.
- Clarke, R. V. & Homel, R. (1997). A revised classification of situational crime prevention techniques. In S. P. Lab (Ed.), *Crime prevention at a crossroads* (pp.17–30). Cincinnati, OH: Anderson.
- Gottfredson, M. R. & Hirschi, T. (1990). *A general theory of crime*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Grasmick, H. G., Tittle, C. R., Bursik, R. J., Jr., & Arneklev, B. K. (1993). Testing the core empirical implications of Gottfredson and Hirschi's general theory of crime. *Journal of Research in Crime and Delinquency*, *30*, 5–29.
- Hirschi, T. (2004). Self-control and crime. In R. F. Baumeister, & K. D. Vohsl (Eds.), *Handbook of self-regulation: Research, theory, and applications* (pp.537–552). New York: Guilford Press.
- Hirschi, T., & Gottfredson, M. R. (1994). The generality of deviance. In T. Hirschi, & M. R. Gottfredson (Eds.), *The generality of deviance* (pp.1–22). New Brunswick, NJ: Transaction.
- 河野 莊子・岡本英生 (2001). 犯罪者の自己統制, 犯罪進捗及び家庭環境の関連についての検討. *犯罪心理学研究*, *39*, 1–14.
- 中川知宏・大淵憲一 (2007). 低自己統制と集団同一化が集団的不良行為に及ぼす影響: 専門学校生を対象とした回想法による検討. *犯罪心理学研究*, *45*, 37–46.
- Piquero, A. R., & Bouffard, J. A. (2007). Something old, something new: A preliminary investigation of Hirschi's redefined self-control. *Justice Quarterly*, *24*, 1–27.
- Pratt, T. C., & Cullen, F. T. (2000). The empirical status of Gottfredson and Hirschi's general theory of crime: A meta-analysis. *Criminology*, *38*, 931–964.
- Tittle, C. R., Ward, D. A., & Grasmick, H. G. (2004). Capacity of self-control and individuals' interest in exercising self-control. *Journal of Quantitative Criminology*, *20*, 143–172.
- Vazsonyi, A. T., Pickering, L. E., Junger, M., & Hessing, D. (2001). An empirical test of a general theory of crime: A four-nation comparative study of self-control and the prediction of deviance. *Journal of Research in Crime and Delinquency*, *38*, 91–131.
- Vazsonyi, A. T., Wittekind, J. C., Belliston, L. M., & Van Loh, T. D. (2004). Extending the general theory of crime to "The East": Low self-control in Japanese late adolescents. *Journal of Quantitative Criminology*, *20*, 189–216.
- Wikström, P.-O. (2006). Linking individual, setting and acts of crime. Situational mechanisms and the explanation of crime. In P.-O. Wikström, & R. J. Sampson (Eds.), *The explanation of crime: Contexts, mechanisms and development* (pp. 61–107). Cambridge: Cambridge University Press.
- Wikström, P.-O. H., & Treiber, K. (2007). The role of self-control in crime causation: Beyond Gottfredson and Hirschi's general theory of crime. *European Journal of Criminology*, *4*, 237–264.

Appendix 逸脱行動誘発状況に関する6シナリオ

シナリオ1 飲酒運転

ある日の夜、あなたはサークルの新生歓迎会でお酒を飲んで過ごしていました。23時ごろ、歓迎会も終わり、店から2キロほど離れた自宅に帰ることにしました。あなたは酔っていることを自覚していましたが、家まで自転車に乗って帰宅するか、それとも目の前にある無料駐輪場に預けるか迷いました。悩んでいたところ、翌日、出席を必ず取る必修の講義に出席するため、朝9時に大学に行かなければならないことを思い出しました。大学までは歩くと30分ぐらいなので歩いていくこともできますが、自転車だと10分かからないぐらいの距離です。

シナリオ2 雨傘の窃盗

ある日の夕方、大学からの帰りがけに、あなたは本屋に寄りました。目あての本を買い、店を出ようとしたところ、急に雨が降り出してきました。雨足はどんどん激しくなり、今は、土砂降りです。しばらく待ったところですぐに止む心配がありません。ふと、入口のそばにある傘立てをみたところ、そこには古びた透明なビニール傘が無造作に何本か置かれていました。自宅までは走って帰れば10分ぐらいの距離ですが、傘がないとずぶ濡れになることは明らかです。

シナリオ3 カンニング

今、あなたの進級を決める重要な定期試験を受けています。しかし、試験は思った以上に難しく、合格ラインに達するかどうかぎりぎりの感じでした。回答に悩んでいたところ、ふと前の席を見ると、成績優秀なA君の答案が見えました。ところが、あなたとA君の答案は異なっていました。

シナリオ4 自転車の窃盗

今、あなたは最寄り駅を降りてこれから2キロ先の自宅に向かうところです。普段は自転車に乗って帰るのですが、今は自転車を修理に出している最中です。今日はどうしても見たいテレビ番組が20分後にあるので、あなたは急いでいました。駅を降りて、近くの公園を通りかかった時、古びた一台の自転車が目に留まりました。その自転車は鍵もついておらず、無造作に電柱へ倒れかかるような形で置かれていました。自宅は2キロ先ですが、走って帰れば番組開始の時間に間に合う距離です。

シナリオ5 横領

ある休日、友人がカラオケにいかないかと誘ってきました。しかし、カラオケに行ってしまうと残りは千円程度になってしまう上に、バイトの給料が入るのは1週間先です。悩んだ末、あなたは友人とカラオケに行くことにしました。現地集合になったので、最寄り駅へ向かい歩いていたところ、誰かの財布が落ちていたのを見つけました。拾い上げて中を見ると、5千円札と多少の小銭が入っていました。

シナリオ6 インターネット上の悪口の書き込み

あなたは数週間前から新しいバイトを始めました。今は研修中なので、店長やバイトの先輩から仕事を教わっています。そんなある日、あなたはこれまでに何度も教えてもらっていたレジ打ちの操作を誤り、その日の収支があいまいでした。それを知った店長は激怒し、あなたはこっぴどく叱られ、これでは大学を出ても社会で使い物にならないと言われました。あまりの言われようにバイトが終わった後も、あなたはとてもイライラしていたので、店長の悪口をtwitterに書きこもうかと思いました。